



針葉樹會報

通巻 第六十號

白峯三山縦走

日 江 井 正 己

夏山第二次合宿に馳参じたのは大分後れた。それでもまあどうやら仲間入り出来た。けれど大して張切つて居らなかつた。九月二日午後一一、五五分の汽車で出發のため新宿へ来て見るこ、日頃の張切りやの通稱カマさんも、ひどく張りきらぬ様子だ。「静岡の種馬」「カン」ちゃんと四人揃つて乗車、車中でも何處へ降りてよいやらわからず、わい／＼騒いだ結果韭崎と決つた。それから大樺の合宿を六日までやり「バットレス」とかいふ、えらくでかい岩壁をどうにか引張り上げてもらつた。七日の十一時「スケー」さん「カマ」さんに別れを告げて、毎日漕ぎ厭きたアツシユを大きな荷物になやまされ乍らどうにか大樺澤へ出て、相當の紫外線で眼が變になるのを我慢しながら釣尾根へ出た。それから山腹を巻いて北岳小屋へ。美しい夕焼、富士、等を満喫してシユラフへもぐる。八日又も快晴。山へ入つてから毎日快晴で、しかも二百十日と二百二十日の間でこんな天氣、少々變だ。今頃ト界じ

や颱風が来たなんて騒いで居るんじゃないかと考へると、薄氣味悪くなる。縦走路へ出るに北、中央兩アルプスが手に取る様に見える。村尾先輩の苦んだ惠那山もだだびろい頂上を雲の上に出して居た。張切つたせいか行程も大分はかどる。新農鳥小屋へ行つて見ようと思つてゐたら、舊農鳥小屋から四十分もかゝるとの事、そんな所眞平御免さあつさりやめた。西農鳥から農鳥までいやにあるので、おまけに秋と思へぬ程ひどい暑さですつかり閉口してしまつた。農鳥のてつべんでは頭が變になつた。ついに水が一滴も無くなつてしまつた。仕方なしに下る。大門澤は小石の澤でその上をグリセードでもやるやうにすり降りて一時間半ばかり歩いてやつと水にありついた。あまり水を飲まなかつたので却つて飲みたくなくなつた。しかし二人が飲むので對抗上いゝかげん噛り厭きた生の「するめ」を噛りながら飲んだ。そして大門澤小屋へ。九日は西山温泉までだ。昨日の大門澤の下りでひどい目にあつた事に朝氣がついた。靴の紙は取れる。足に豆ができる。こんな澤もう一生下るまいと思つた。香氣にぶら／＼歩いて來ると早川の釣橋に來た。下は淵の様になつて居り淀んでゐる。えらく危険だ。前の二人が馬鹿に揺らしやがるので、小生いかれた時の様な恰好で針金に縋り附きながらやつと渡つた。「バットレス」を登つてゐる時より遙かに恐ろしかつた。それから平坦な道を歩いて奈良田へ。大々人間の顔を見なかつたので、此處で人の顔を見ると急に里心がついた。西山温泉は中々良い所だ。風呂へ入つて久方振りの垢を落して飯をくつた。種馬はついに七杯、小生六

杯半、「カン」ちゃんは老人になつた相で四杯で止めたが、飯櫃は空になつてしまつた。何しろ今迄ひどい食物だつたから仕方がない。北岳小屋では味噌汁の實がないので、本當の「味噌汁」をすゝり、ハヤシを作つても鹽を忘れて、ひどい目にあつた。鹽なしハヤシは合宿では大食の徒のよい藥になるだらう。西山温泉へついた時には、三人とも正氣の人間とは思へなかつたらう。小生はズボンが大分さいてしまひ、ゲートルで上手に蔽したがそれでも相當口が明いてゐて、歩くたびに口があく。「種馬」は種馬で場所が悪い、けつのところを裂き、又それと全く同じ所の猿又をさき大弱り、幸ひ得意の羚羊の毛皮で蔽つてゐた様だ。十日は下り坂の天氣だが足馴越をやる。この峠の上りの長いにも、相當アゴを出した。下りは道に伸びてゐる蛇を踏んで飛上つたりして下る。種馬は小室あたりより本領を發揮して飛んで行つた。しばらく彼の後について行つたが、暑いのも足が痛いのもで斷念してそれでも止ると尙汗が出るのでえつき／＼歩いて、鯉澤からバスで甲府に来る。甲府であまりきれいになつたスケさんカマさんに會ひ度膽を抜かれた。

地藏岳の遭難

柿原謙一

思えば、地藏岳の遭難から既に一年の月日が経過してゐます。當時の模様は、針葉樹會の席上で林君と私から詳細に報告致しましたが、今度森川君と相談の上、その時の感じ、遭難の原因等に就いて、一應記録にまとめ、會報に残して置いたなら、將來山岳

部に入つて来る人の參考にもなる事であらうし、又私達としても岩登りの心構えについて何かを汲み取る事も出来るだらうし等々考えた末、森川君は遭難當時の感じ、私は遭難の理由を、こゝに發表する事に致しました。

昨年の十月廿九日新宿を發し、北岳大樺小舎秋季合宿に加はるべき後發隊一行は、廿日の夜を北御室小舎に過し、廿一日午前九時頃賽ノ嶺に立つて、北岳パットレスを望んだのでした。

茲で地藏岳のオベリスクに登る豫定は、森川君が既に出發前から計劃してゐたことで、直ちにザイルを持つて、その計劃を實行する事としました。記録によつて調べた處では、大した智識は得られなかつたので、兎に角も岩に衝き當つて、登れる様ださ自信がついたら登るこゝとし度い、と言ふのが是迄私達の執つた態度でありました。で森川がトップ私が確保の役とし、二人で登攀を始めた處、一番上のテラス迄は大した時間もなく登り得ました。此處で考えたのは、今迄私達の取つたコースに於て、登り難い様な處には、ホールドが立派に刻んであり、又自分達のこれから登らうとする上方にもホールドが刻んである、これを利用するならば登り得るのだ、と言ふこゝでした。そこで右方にあるクラック（之は今年九月小谷部君が登つたコース）を捨て、ホールドの刻んであるコースを登ることにしたのであります。コースの誤認が爰に在つたのです。

森川は三米か四米上つた處、ホールドが悪さうだ、と言つて降り、そこでテラスの端の一・五米位の棒形の岩に最も確實と思

はれる確保をした後、再び彼は登り初めたのです。そして四米も登った頃、彼の身体はスムーズに動かず、「ホールドが悪いんだよ」と言ひ乍ら、大いに頑張つてゐます。私は段々ザイルを伸ばします。そして私の處から見上げるさ、彼の手は、殆ど上にさういてゐる様に見える處迄登った頃、彼の身体は全く伸びて、いかにも動きにくい様に見えました。少しも動かず、手の活動も、足の活動もありません。これはいけない、と思つてゐるさ突然にガリ／＼と言ふクリンケルが岩と擦れる音と共に、彼はウムと叫んだまゝ、五十糎も岩に手を懸け乍らすり落ち、いきなり弾かれた様に私の頭の上に弧を畫いて飛んでしまつた。そして空中に旋回して私の視界から去つてしまつたのです。

がその時ザイルは最早寸分のゆるみなしに緊張して、ゲインと張り切つてゐました。火の出る様なザイルの緊張した線の太さは、その瞬間彼は助かつたぞと言ふ直観を私に與えて呉れたのです。私は夢中で森川の名を呼びました。しばらくしてウー、ウーと言ふ彼の聲がしました。後で語る處によるさ、それは彼の返事の心算だつたさうです。「ザイルを弛めて呉れ」と彼は下から小さな聲で言ひます、然し下の見えぬ私には、何處迄伸ばして好いのか判らず、除々に伸ばしてゐる間に、林君が飛ぶ様にして森川の處迄來て呉れ、それから皆して、賽ノ碛に降ろしたのです。

卅一日の夜は林君の獻身的な努力があり、皆して森川を勞はり十一月二日の朝雨宮文之助（通稱文）に背負はれ、彼は青木嶺泉に下りました。その夜鷹野君と共に韭崎町の秋山醫師が來り、そ

の診断の結果が極めて樂觀的だつたので、吾々は初めて重苦しい氣分を幾分なり解放出來たのです。

この遭難の原因として、森川君自身の語る處、又部員の考えなどを綜合してみますと、

1 偵察に誤認があつた事、即ち私達のさつたコースに人工的の刻みがあり、之が立派なホールドであつたので、之を利用した私達は、上迄續いてゐるものと誤認し、ために、最後に至つて悪場をなしてゐた事を考え得なかつた。

2 空氣は十月末とて極めて冷く、登攀の時間は十時頃であり岩も冷く、その爲めに、森川の手先が自由な働きを失つた事。

この12が直接の原因であり、私達の技術未熟且つ不注意であつたと云ふ批判は、甘んじて受けねばならぬと存じます。尙

3 森川は當時豫科三年在學中で、學期試験直後のため、身體は弱つて居り、且つ前日ドンドコ澤遡行の時重荷に災されてゐた事。

4 賽ノ碛で十分の休憩をせず、急いで登つた事。

5 靴紙のクリンケルが相當磨滅してゐて、滑り易かつた事。等は遠因として考え得るのであります。

「私達は決して遭難してはならない」これは私達の不幸な體驗から得た言葉であります。青木温泉に至る迄、山友始め未知の人の厚い情け、韭崎町に於ける杉浦先生岩田氏の厚情、それから東京に歸つて受けた先輩はじめ部員諸兄の手厚い慰めに向つては私達は全く何と言つて好いのか判りませんでした。又父母親戚の

人々の前に立つても、私達の遭難の引起す結果を考えた時、山行特に岩登りにあつて、如何に注意しても注意し過ぎる事はない、と言ふ事を感じたのであります。

(一九三六・九・二九)

雁 歸 る 頃

森 川 眞 三 郎

もう一ヶ年過ぎて了つた。十月三十一日は、素々私の誕生日です。思へば其の誕生日が危く命日になりかけたのだ。

秋の空は澄渡つて居た。學期試験の憂鬱から開放された吾々一行十一名は足取も軽く、燃る様な紅葉に彩られた、ドントコ澤の急坂をせつせと登つて行つた。二日後には大樺小舎に合宿中の本隊と合流する筈でした。斯くして三十日は無事北御室小舎泊り。

その夜は満天、銀砂の様な星がきらめいて居た。凡、謙、兩兄と三人で、星明の下に腰を下して、紅茶を吸つた事も覚えて居ます。天ノ川の冷い感觸を遮る様に、紅茶の人懐かしい香が、つーんと深い闇の中を流れて行きました。

翌三十一日は薄晴、寒い朝です。小舎内に置いた飯盒の水が凍り付いて居た。今日こそ本隊に會えるさ早朝から、勇んで出發した。

賽の河原からの駒は何と云ふ美しさであらうか。右手には地藏佛が巨人の様に、すつくさ立ちほだかつて居る。心は躍る。併し永く止つては居られない。行先は遠く、秋の日は短い。私と謙兄は直に、ザイルを持つて地藏佛へ、他は高嶺へ先發。

今はもう、我武者羅に唯、岩に興味を持ち始めた者が誰でも經

験する、あのひたむきな氣持で一杯。甕に憑かれた様に、恐れ氣もなく、ホールドの少い、テラテラの坊主岩に正面からぶつかつて行つた。始めに二つ程、小さなクラックを越して登つた。茲までは何でも無い。あと十米、これからが問題だ。ちよつと見た所登れさうにも無い。糞!!「ジツヘル頼むよ」「よし」心強い聲に促されて岩に取つた。豫想外にホールドが良い、直に三、四米登つた。それからがいけない、指先はこける、四肢は疲れる、下の方を見ると、何だか確保が心許ないので、とうとう元のテラスに引返した。手を暖め確保を直して、再度岩へ。表面の腐蝕した花崗岩の面はざら／＼して手懸りが悪くて、始末におへない。膝と肘のフリクションが、僅に助けになる。何さか七八米すり上つた。あと二米。ホールドは愈々悪くなつた。指先が三本位しか掛らない。指の感觸も無くなつて來た。併し何の危氣も無い。ふと見るさ上衣のポケットから、半分覗き出た、パイプが落ちさうで氣になつた。之が今になつても、妙に頭にこびり付いて居る。更に一米程、すり上つた。あと二三尺だ。日光を受けて白く光る頂の南面が手のさぐく様な所に見える。ホールドは益々悪い。手の方は大分頼りなくなつた。何糞!! 爪先に全身の力を込めた。一瞬左足がすり滑つた。了つた!! 併し心は案外落着いて居る。下のテラスまで、そのまゝすり落ち様と本能的に身を岩にすり付け様と努力した。途端に世界が一廻轉した。駄目だ!! 併し尙希望は棄てない。次の瞬間には、何となしに唯助かるな、と思つた。遠くの方に逆様になつて山が見えた様な氣がする。一秒にも足り

ない間のことである。瞬間、大きな衝撃が、がーんと來た。世の中が急に眞暗になつた。

× × ×

「オーイ」「オーイ」遠くの方で誰かが呼んで居る。ふと眼が覺めた。深い／＼眠りから醒つたのだ。眞白な岩が直ぐ眼に入つた。おや？ 茲は何處だ。石牢の底の様な所だが。驚いて身を起さうとしたが、之はどうした事だ、體が全然動ない。呀！ 俺は地藏佛から墜落したんだ。途端に又叫んで居るのが聞えた。鋭い聲が邊りに反響するのが快く耳に響く。「森川！ 大丈夫か」謙ちゃんだ。「うーん」自分では答へた積りだが、聲が出ないらしい。上で頻りに、呼んで居る。氣は不思議な程、冷靜だ。血の滲んだ手を泌々と眺めた。俺はまだ生きて居るんだ。左手がぶら／＼で、全然感じが無い。突然私は突拍子も無い事を思ひ出した。それはH・シュナイダーの遭難の事である。彼は獨りでスキー登山中、滑落して大腿骨を露出する程、突き外して了つた。片輪になればスキーが出来なくなるさ考へた彼は、自分で骨を嵌込んで、とう／＼不具にならずに濟んだと云ふのである。私は急いで右手を左の肩に持つて行こうとした。背骨の右がぎくりと痛んだ。駄目だ動かない。さ下の方で人の氣配がする。誰やら懐しい顔だ。急に思ひ出せない。あゝ凡ちやんだつたつけ。一瞬、家の母の顔がさつと過ぎつた。さうだ、俺は大變な事をしてしつた。私の心は急に忙しくなつた。昔の事、家の事、學校の事がごつちやになつて頭を、かけ廻る。その時の私は、もう獨りでは、何うする事も出

來ない、慘めな遭難者だつた。

それからの皆の厚い／＼、友情は一生忘れる事が出來ない。いくら書いても書き切れない。

私は其處に一つの新しい世界をさへ見た様な氣がします。單に生きて居る、さ云ふだけでなく、生きて居たい、と思ふ世の中を感じました。それは又永い／＼苦痛を通して初めて、知り得たものです。報酬を求めない努力、それは何と美しいものであらう。又何と尊いものであらう。

親の愛、友情、そして私達の山登りもさうだつたのです。

私達は山に登りたいから、山に登ります。

追記 昨年遭難の節は針葉樹會の皆様にも御心配をかけ誠に申譯御在ませぬ。尙其の後の御厚情は全く感謝致して居ります。幸ひ負傷も全癒し、三月以來又元通り山に登つて居ります。先月、北岳大樺小舎に行つた節は往復とも鳳凰三山を越えて、思ひを新にして参りました。地藏佛には登りませんでした。右御報告迄。

今度は助さん

ク マ

毎日十二時間乃至十三時間の強行軍で、漸くの事に越中から飛騨をかすめて信州に入り神河内へ這入つたその翌る日の事、悠りして岩魚でも釣つて行くといふペン公と、どつちでもいい、といふ助さんとを知らぬ内に説教させて、朝の一番で神河内を發つ事になつた。いつもは七時廿分だが大正池の下で徒歩連絡があるとい

ふので、七時にバスが出る事になつてゐる。その積りで河童橋へ行つたら、トタンに大型が出て行つて了つた。仕方がないからハイヤーで行かふと思つたが、三人ぢや馬鹿々々しい、あゝ二人來れば松本まで通して一圓五十錢増しでいゝとの事、それにしやうさいふ事になつて丁度二人西系屋から發つ人があつたので、番頭に頼んで急いで貰ふ事にした。所が中々來ない、助さんブン／＼おこり出した。何してるんだい、來なくつたていゝぢやねえか、早く出せよ、乗り繼ぎに間に合はれえぢやないか、さいふ。近ぢやんが去年ホテルの前で演じたあのツラと同じだ。二人のお客さん大あはてでやつて來た、どうも濟みません／＼さしきりに謝まつてゐる、實は考へると可笑しいのだ、此の二人の人のお蔭で一番の乗繼ぎに間に今ふのだし、二人が來れば二番になるかペラボ／＼に高い金をさられるのだし、助さんのおこるのがどうも理屈に合はぬ、所がお二人さんの方もひどく恐縮してゐる、三人は後側に豪然と構へてゐるのに二人は前の腰掛に小さくなつてゐる。それだけならいゝが徒歩連絡の所で金を拂ふ段になつて一圓五十錢が急に五人で五十錢に値下げになつたらお二人さんの方で「お待たせしたんだから私達の方でお拂ひします」さひどく又恐縮してゐた。俺にはどうもいきさつがわからないが、助さんの心臓の強のには呆れたもんですよ。

こんな山も

増山清太郎

——みかぐらやま——かう書いてもピンと來ないだらう。

——御神樂岳——と書けば、は、ああれか、と氣附くに違ない。名は知られてゐる。併し阿賀川沿の名邑津川ムロヤの町から室谷川ムロヤの谷を遡るこゝ六里にして始て山麓に達するこの岳に、曾て登山を試みた會員はあるまい。否、遠くから望見た人も少いであらう。一三八六米の山頂は、飯豐、磐梯、守門、會津駒等に圍れて、甚だバツとしない存在だ。けれど、平常株屋の小僧が、五拾圓貸せの百圓寄越せのつて奴を裁いてゐる身には、都會人から逃れるのは何より嬉しい。有名な處は人、人、人で鼻持ならぬだらう。この岳なら、よもや東京の人には會ふまい。東側は鬱葱たる深林、西側には偉大なる岩壁を抱いたこの岳は、決して態々訪れた旅人を失望させはしまい。そう思つて、十月十六日の晩、磐越線廻りに乗込む。東山行の團體も案外大人しく、快く眠るうちに、やがて猪苗代へと差掛り、お馴染の磐梯の麓を廻り、阿賀川を下つて津川に着いたのは九時過、天満までバス、それから五里の里道山道を歩いて、室谷の部落に落着く。

阿賀川の谷の景色は、豫て音には聞てゐたが、成程良かつた。水は綠色に澄んでゐる。紅葉は盛りだ。奇岩怪石も散見する。紅葉の色は、やはり北の方、霜の多い所でなくては駄目だ。北に行くに従つて色がよくなり、遂に大雪山に達するならば、如何なる彩管を以てしても現し得ないと思はれる、或時には毒々しいと思ふ程に鮮かな紅や黄に彩られてゐるのだ。秋の彼岸の頃の大雪山の中腹の紅葉などをウツラ／＼想出してゐる間、汽車は美しい谷に沿て、下勾配を快く走つた。室谷川も、もとより本流に劣り

はせぬ。それに山の中にも田圃が開けて、住民は富裕な様子、室谷の部落には案外にも宿屋があつて、旅の呉服屋などが泊つてゐる。目差す御神樂山は津川の町端れから、彪大な貌を紫色に霞せてゐたが、室谷に入るまで、次第に大きく近くなるだけで、さつぱり形は變らなかつた。少し上流の不動瀧などを見に行つてゐるうちに、やがて日も暮れる。

……なにさ、御神樂山に登らつしやるかれ。半日でけえつて来るなあ、そりや駄目だね。どうしても丸一日は掛るで。え、か、繪圖を持つてなさるから、俺が言はいでも判るだらうが、お頂上まで二里あるで。川の向から澤について登るだが、道はねえぜ。四五年前までは、道を切つてあつただが、登山の衆も来れえだで今ぢや道も判らなくなつたなあ。藪がひでで、なか／＼えらい。藪を出ると、樺林だ。朝早く出て、この邊で晝飯だなあ。大きい樺で遠くは見えれえ。オリンが平と言つて、こゝが一番危い所だて。え、か、繪圖にもソネは載とるだらうが、ほんとに行つて見たらソネは一本でれえぞ。こんなに（と五本の指を示して）同じ様なソネが並んでるぜ。一本間違つて降りたら、この村には歸つて来られれえで東谷の岩の上に出る。えれえ岩さ、あすこあ猿でも下れめえ。つい去年もこの下の檜山の若衆が二人、オリンが平で迷つてオツ死んだで、若え者許りで行く處ぢやれえ……。その夜、招いた熊狩の名人の話はなか／＼盡きない。要するにこの樺林を抜出て草原を行くと頂上（三角點の手前の峯）に達して、小さな池がある。この山を開いた覺道上人が行をした時に掘

つたもので、旱天に涸れず、霖雨にあふれず、常に澄み返つてゐる。この池をいぢれば忽ち天候惡化するから、雨乞に利用する。村人が登山するのは、熊狩と雨乞だけだ。道がなくて藪がひどいから、なか／＼困難で半日ではとても駄目だ。來年の春、硬雪の頃にまたおいで。熊狩にも連れてつてやらう。御神樂山に泊つてもつと先まで行つても見よう。明日の朝は裏の山に案内して、俺がよく地理を説明して、御神樂山に登つたと同様の知識を授けてやらう。この谷は景色が良いから、もつと奥まで行つて御覽、と云ふのだ。快くその説に従ふ。藪のひどいことは、此日既に見分濟なのである。翌日はどんよりした曇日。熊狩爺さんを案内に立て、裏山に登る。御神樂山の頂は雲の中だが、遠く飯豊、磐梯を望み、熊狩の話に打興する。此邊の熊は大きくて二十貫といふから「我等の熊サシ」位のものだ。そんな熊なら山の中で會つたつて怖くはあまい。その熊を、槍で、鐵砲で、また或時は出合頭に腰に下げた鍾馭様のやうな劍で、この老人は既に四十幾頭を手に掛けた。山の中では只見川の方から來た熊狩に會つた事があるから、會津分へも抜けられる筈だが、村に経験者はない。何せ、岩壁が多いし澤には瀧があるから、仲々困難と思はれるとの話だ。瀧の混つた栗飯を食べ、爺さんからトロ、薯を貰つて、午後から歸途に着く。四里程來た處で、昨日汽車で一處だつた早高生の家に立寄り、茶を汲み、栗を焼て、村の平和を搔亂す剽盜の話などを聞く。かくて、津川の温泉に汗を流し、上越廻りの夜行で歸京する。あては外れたが、美しく、楽しく、和かな旅であつた。

山岳部報告(九月)

記録

(1) 鹿鹽―三伏峠―鹽見岳―間ノ岳―大樺小屋(九・二―五)小谷部
 (2) 大樺小屋生活(北岳バットレス)(九・二―一〇)小谷部、望月
 森川、大塚、日江井、此回は第一、第四、第五の尾根を登攀。
 第一尾根は始めて手がけしものならん、尙望月、大塚、日江井
 は七日より三山縦走に向ひ、小谷部、森川は鳳凰を越へ、小谷
 部單獨にて地藏佛の登攀に成功し、十日に兩隊甲府に落合ひて
 歸京。

(3) 大藏高丸(九・二三)岩崎

日誌

○夏山報告會 九月廿一日(月)於國立しみづ
 出席部員(本科十名、豫科九名、専門部二名)
 ○定期部員集會 九月廿八日(月)於國立部室
 出席部員(本科八名、豫科六名)
 今秋のプランにつき相談をなす。

記録

○琴川より國師岳へ(十月十七・十八日)中川孫一 吉澤一郎
 近藤恒雄 柿原謙一 望月達夫 岩崎利一
 ○守屋山(十月二十五日)芋川稔一 高瀬進三 鈴木英雄
 消息

松木謙三君 安田銀行大阪支店(東區高麗橋三丁目)に轉任

宇美敏夫氏歡迎松木謙三氏送別會(十月二十三日)於如水會館

出席者(主賓)松木謙三 宇佐美敏夫(會員)中川 吉澤 村

尾 近藤 金田 園山 高瀬 鈴木 増山 小柳(部員)林

小谷部 望月 森川 小林 和田 新羅 原 岩崎

オリムピック、ホッケーチームのコーチとして、歐洲遠征から
 歸つた宇佐美氏から經驗談を聞く。ホッケーそのものは吾々に
 はよく判らないから、自然話題に上らなかつたが、シベリヤの
 風光の美しいこと、長い遠征の旅の、役員選手に及ぼす精神的
 効果、ロザンセルス大會との比較論等は傾聴すべきものが多か
 った。また伯林に在る孫田教授や關守三郎氏などの活動してゐ
 る模様も知るこゝが出来た。

松木謙三氏が大阪に赴任するやうな情勢に在ることは豫て承つ
 てゐたが、昨日辭令が出たといふ。二十四日に例の元園軒で盛
 大な送別會を行ふ豫定の處、御本人の都合がつかないといふの
 で、急に歡迎會の席を送別會に改め、さゝやか乍ら、ビールを
 抜いて、心から榮轉をお祝ひする。松木氏は、赴任の上は必ず
 關西の針葉樹會を盛にすべきを誓はれた。因に氏は二十九日夜
 横濱發大阪に赴いた。

幹事から

一橋山岳部員關根修君(専門部二年)は去る十月二十一日逝去
 せられました。謹で哀悼の意を表する次第であります。仍つて
 次號は同君の追悼號と致します。原稿は十一月二十日迄に望月
 達夫君(杉並區阿佐ヶ谷五ノ六三)へ御提出下さい。